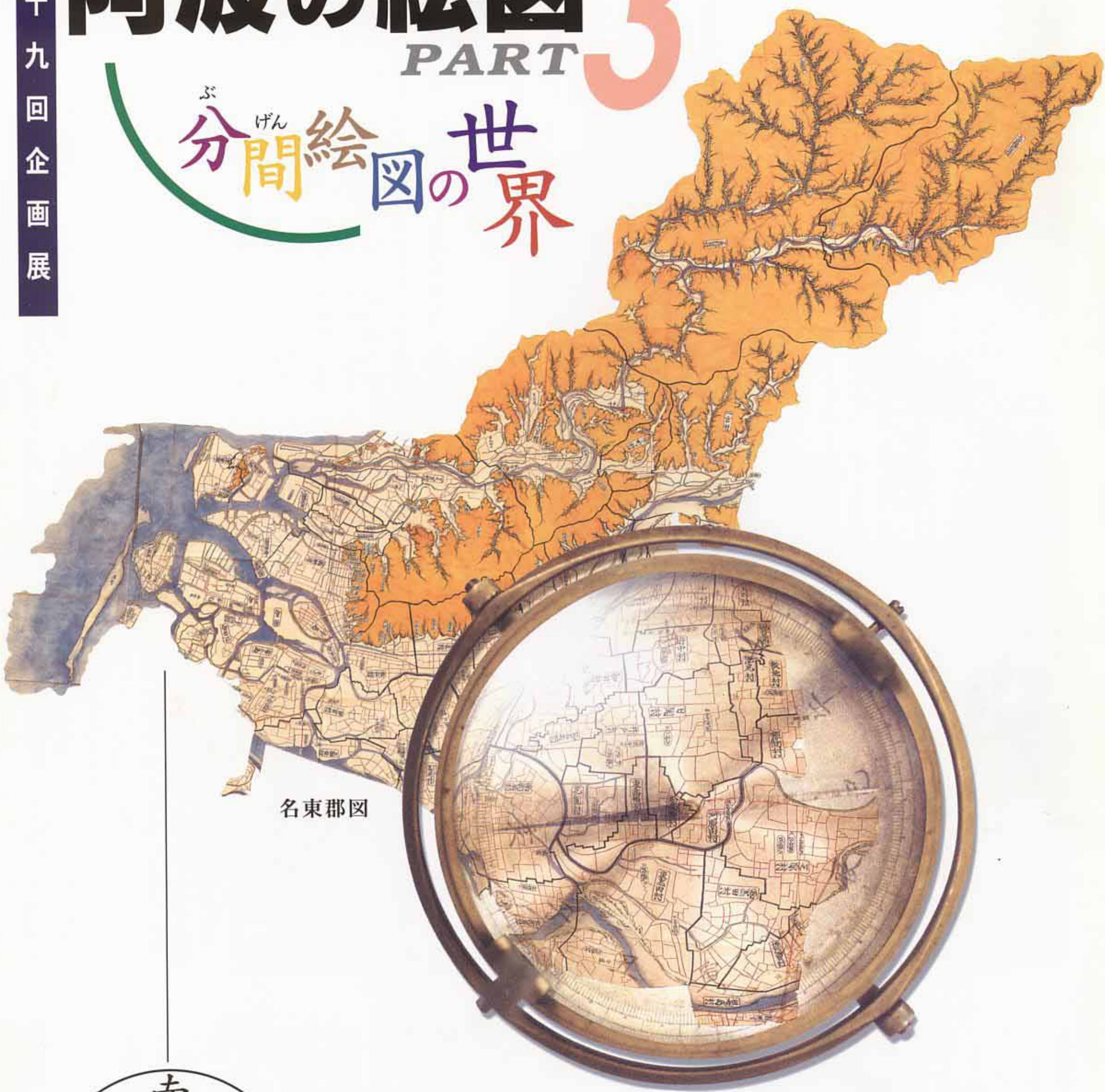
第十九回企画展

阿波の絵図 PART 3

分間（ぶげん）絵図の世界



名東郡図

平成11年8月3日(火)－10月24日(日)

徳島県立文書館2階展示室

休館日 毎週月曜日　毎月第3木曜日
10月25日～11月1日(館内くんじょう)

展示図録目録用

文化の森総合公園 徳島県立文書館

徳島藩の実測分間絵図

平井松午

見取図から分間図へ

江戸時代に作成された絵図の多くは、実測結果に基づいていない見取図の類です。それゆえ、絵図の形や内容には歪みや誤りが生じることになります。しかし、実学を重んじた八代将軍徳川吉宗治世の享保年間（一七一六～三六）以降、測量結果に基づいて描かれる分間絵図が作成されるようになってきます。「分間」（ぶげん）とは縮尺を意味します。江戸時代の実測分間図として有名なのは、文政四年（一八二一）に完成した伊能忠敬（いのうただたか）の手になる「大日本沿海輿地全図」です。

伊能忠敬は、沿岸の往還道に沿って測地点間の方位（角度）と距離を測り、その結果を縮図にしていきました。ただ、こうした測量方法だけでは誤差が生じやすいので、遠望のきく山や島などを目当てに方位を測り、測地点の位置を是正する測量法も併用しました。方位を測るために、磁石をのせた「小方儀」などと呼ばれる測量器具が用いられました。その方法は、平板測量の道線法や交会法にあたります。当時、こうした測量方法は「規矩術」（きくじゅつ）もしくは「量地術」、「測地法」などと呼ばれていました。

紅毛流規矩（きく）術と岡崎三蔵

規矩術は、寛永年間（一六二四～四三）に長崎出島のオランダ人外科医カスハル（加須波留）が長崎の樋口権右衛門に伝授したと言われ、権右衛門の弟子を通じてオランダ（紅毛）流測量術である規矩術が広まったと考えられています。ただし、当時は鎖国体制下にあり、一種の幻術とみられた規矩術は秘術として伝えられたようです。

伊能忠敬が活躍したと同時期に、徳島藩にも測量方の岡崎三蔵（おかざきさんぞう）を中心に実測分間絵図が作成されました。岡崎家文書（日本学士院蔵）などによれば、岡崎家初代の岡崎治兵衛は紀州の出身で、樋口権右衛門に師事していたところを請われて正保二年（一六四五）に阿波に来国したとされていますが、その詳細については不明です。岡崎三蔵は治兵衛から数えて四代目にあたり、寛政一一年（一七九九）に『南阿測地法』全七巻（稿本・個人蔵）を著しました。「南」は南海道を、「阿」は阿波を意味します。同書は二四三条からなり、家伝の測量術に加え、当時規矩術の主流であった清水流や大阪の大島流など、他派の測量術書も参考にしたとみられます。

岡崎家の測地法は「紅毛流規矩元法」と言い、これは見盤術、元器術、一本術、応変術、印可術、図法之伝からなっています。元器術とは規矩元器（磁石）を用いて方位を、一本術とはコンパスを用いて地点間の距離や高さを測る方法です。図法之伝とは絵図仕立てのことを言います。こうした岡崎三蔵の測量術は、「阿波国図」に結実することになります。すなわち、三蔵は享和二年（一八〇二）に徳島藩より「阿波国図」の作成を命ぜられます。この「国図」編纂にあたっては、紅毛流規矩元法にもとづいて実測分間絵図が作成されました。三蔵がとった「阿波国図」編纂の手続きは次のようなものです。

まず、阿波国内の藩政村五八〇ヶ村余を一村ずつ測量して、一丁（約一〇九m）の長さを絵図面二寸（約六cm）、すなわち縮尺約一八〇〇分の一の「分間村絵図」（村図）を作成します。それから、各村の村図を郡単位にまとめた絵図面二分一丁（約一万八千分の一）の「郡図」を作成し、さらに郡図を再編集して阿波一国仕立ての絵図面八厘一丁（約四万五千分の一）の「国図」を完成させるというものです。

当初、この測量事業には岡崎三蔵の息子たちや叔父も従事し、ほかに測量補助（下役）あるいは別動隊として山瀬佐蔵や森清助らも活躍しました。それでもこの事業が終了したのは天保二年（一八三一）で、実に三〇年の歳月を費やしています。この間、岡崎家の当主も五代目の宜平に代わっています。翌三年には、岡崎家は徳島藩領であった「淡路国図」の作製を命ぜられ、弘化四年（一八四七）に完成させています。

分間絵図の特徴

実測に基づいて作成された村図の特徴は、山川や家屋、寺社、田畑などの位置や形状が正確に描かれていることです。村図の作成にあたっては、まず村の境界（外周）に測点を設けて山川や家屋・社寺などの地物の位置関係を測量していきます。それゆえ、凡例とともに、村の外周距離が明記されている分間絵図もあります。また、村図は絵図面二寸に縮図するため、図の周囲に二寸間隔で碁盤目状の「系（罫）」が引かれています。

分間絵図では、それまでの見取絵図に特徴的であった絵画的な表現が後退し、村図の場合には山地は山吹色、田は薄黄、畑は薄墨で色分けされるなど、平面的に表現されていることも大きな特徴です。郡図や国図でも山地は山吹色、平地は白地で色分けされています。

岡崎家文書などには、文化五年（一八〇八）の伊能忠敬による四国測量の際に、三蔵の子宜平が忠敬の測量隊人夫に紛れてその測量技術を観察したとの逸話も伝えられています。そこでは、忠敬らが使用した新式の測量器具に関心が寄せられていますが、その測量術については「格別ノ義モ御座ナク」と報告されており、三蔵らの自負と気概を感じることができます。

事実、岡崎三蔵らの測量術・絵図は、伊能忠敬の測量技術と比較して遜色ないものです。伊能忠敬の目的は日本列島沿岸の実像を科学的に証明することにあり、その結果、沿岸部は詳しいものの、内陸部はほとんど空白のままでした。これに対して、岡崎三蔵らの測量は徳島藩領のみを対象としたとはいえ、領内全域をくまなく測量し、精緻な領域図を作成した点で高く評価されます。分間絵図の出来ばえも高い水準にあり、様式においてもそれまでの絵画的表現を排した点で、「地図」に大きく一歩近づいた「絵図」といえます。

（徳島大学教授）

ごあいさつ

本当に江戸時代の人々の才知と技量には驚かされます。かつて私は徳島県埋蔵文化財センターに勤務し発掘にあたっておりましたが、徳島市新蔵町一丁目、旧城下の武家屋敷地の発掘に際し、元禄四年の「綱矩様御代御山下絵図」、安永五年ごろの「徳島絵図」、天明年間の「御山下絵図」、安政年間の「御山下島分絵図」などの城下絵図を参照しました。その屋敷割図には、屋敷地四辺の各間数も入っており、当の発掘地が安永五年（一七七六）二月十九日以前は笹山伊左衛門屋敷であり、以後は元家老山田織部の分家である山田左守の屋敷であることが確定でき、さらに各武士の屋敷地を復原することができました。江戸時代の絵図は専門の測量家や絵師がその作成にたずさわったものでありましょうが、城跡や寺社、一軒一軒の家、一里松などが描かれ、与える情報も多量で詳細です。またとてもカラフルで見ていても愉しいものです。

測量家として伊能忠敬はよく知られていますが、阿波では岡崎三蔵、山瀬佐蔵が測量・作図に当たりました。その成果が今回の「阿波の絵図パート3―分間絵図の世界―」です。最近歴史学では、「絵巻物」や「絵伝」、そして「絵図」の情報から歴史を再現することもすすめられています。ご覧いただき、江戸時代の各地域のイメージを再現していただきますれば幸いです。

展示にあたりましては、貴重なこれらの絵図をお貸しいただきました阿南市をはじめ県内の関係各機関、林直大氏・森英雄氏をはじめ個人の所蔵者の方々、そして全体的な展示のご指導をいただきました徳島大学の平井松午先生に深く感謝いたしますとともに、心より御礼申し上げます。

平成十一年八月一日

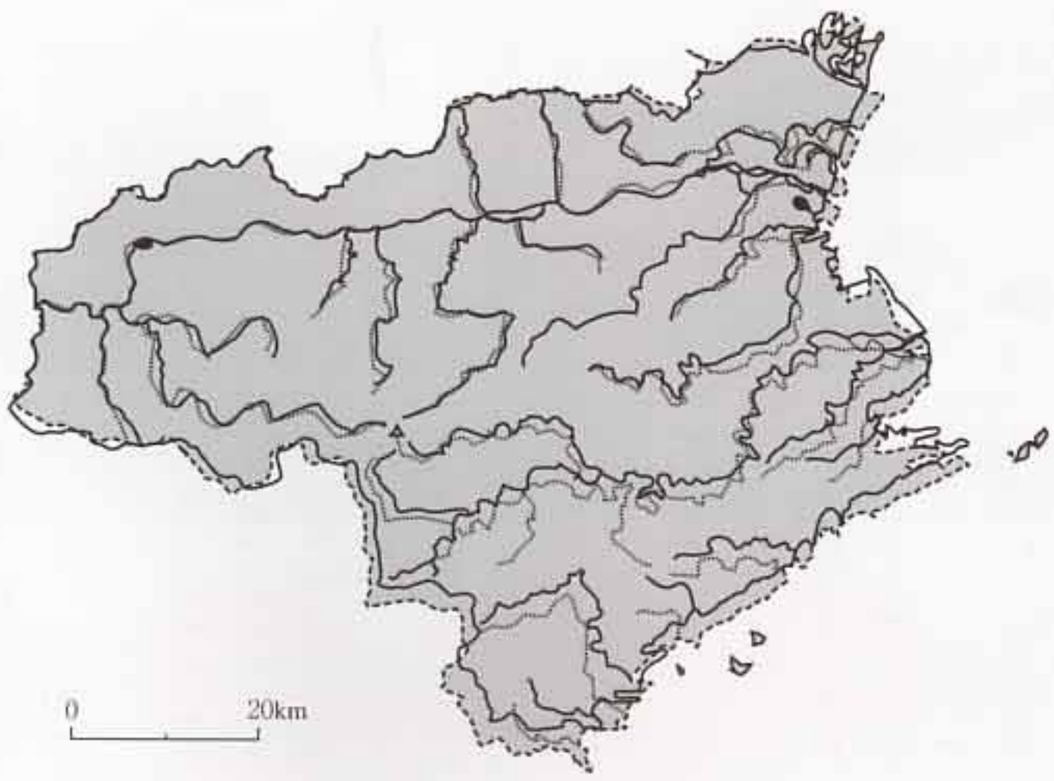
徳島県立文書館長　逢坂俊男

【表紙説明】

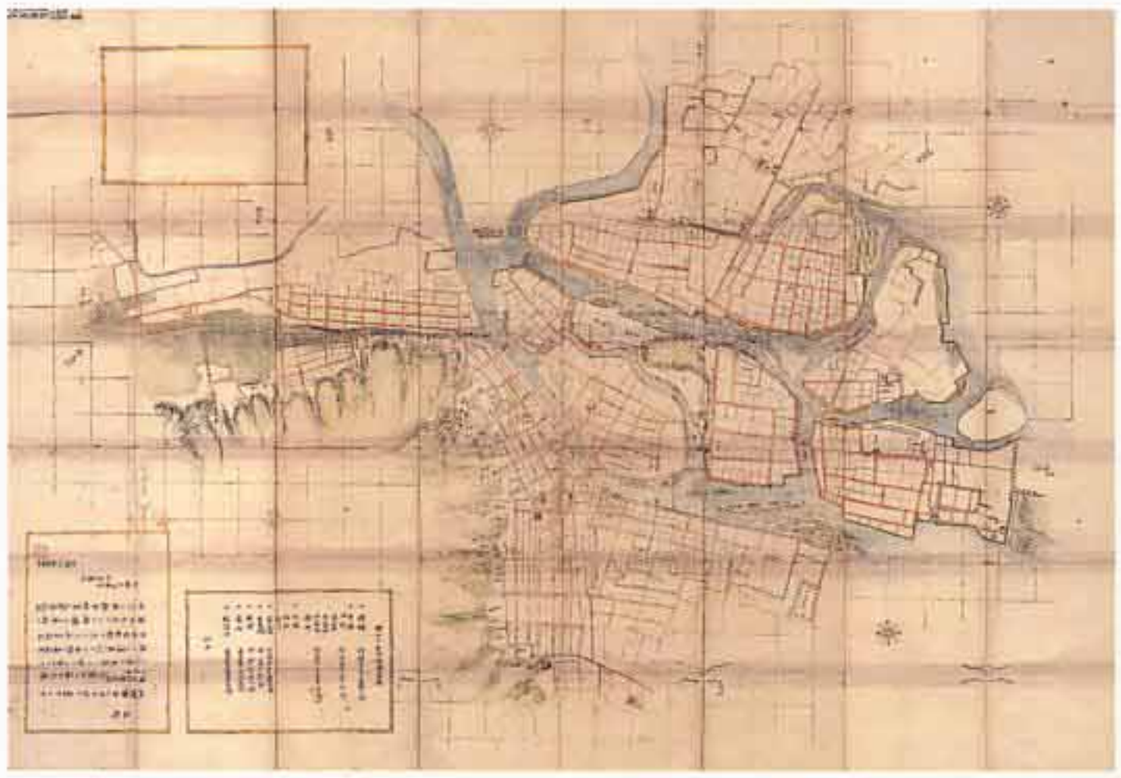
中央の絵図は文化年間に作成されたと推定される「名東郡絵図」。山吹色は山、道は朱、青は水、黒線は郡界・村界など岡崎系統の分間図の特色をあらわしている。中央の器具は「小方儀」（方位磁石）とよばれる測量器具。左下の方位盤は分間図に描かれた印を模したものである。

【分間国図の精度】

岡崎家の作成した阿波国絵図の範囲（太い実線）と現在の県域（陰影部）を比較したもの。精度は非常に高いことがよくわかる。

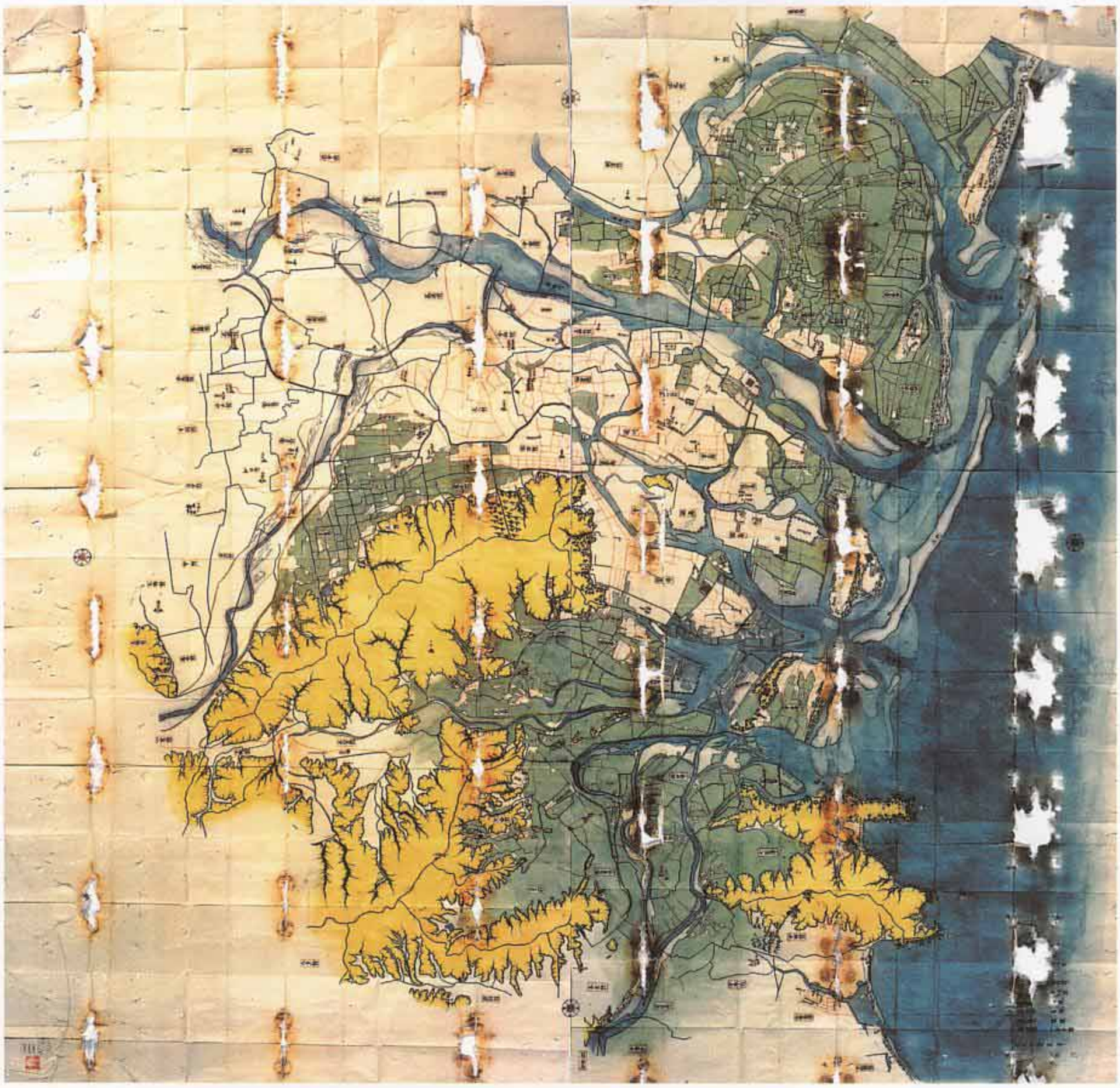


城下絵図
町絵図



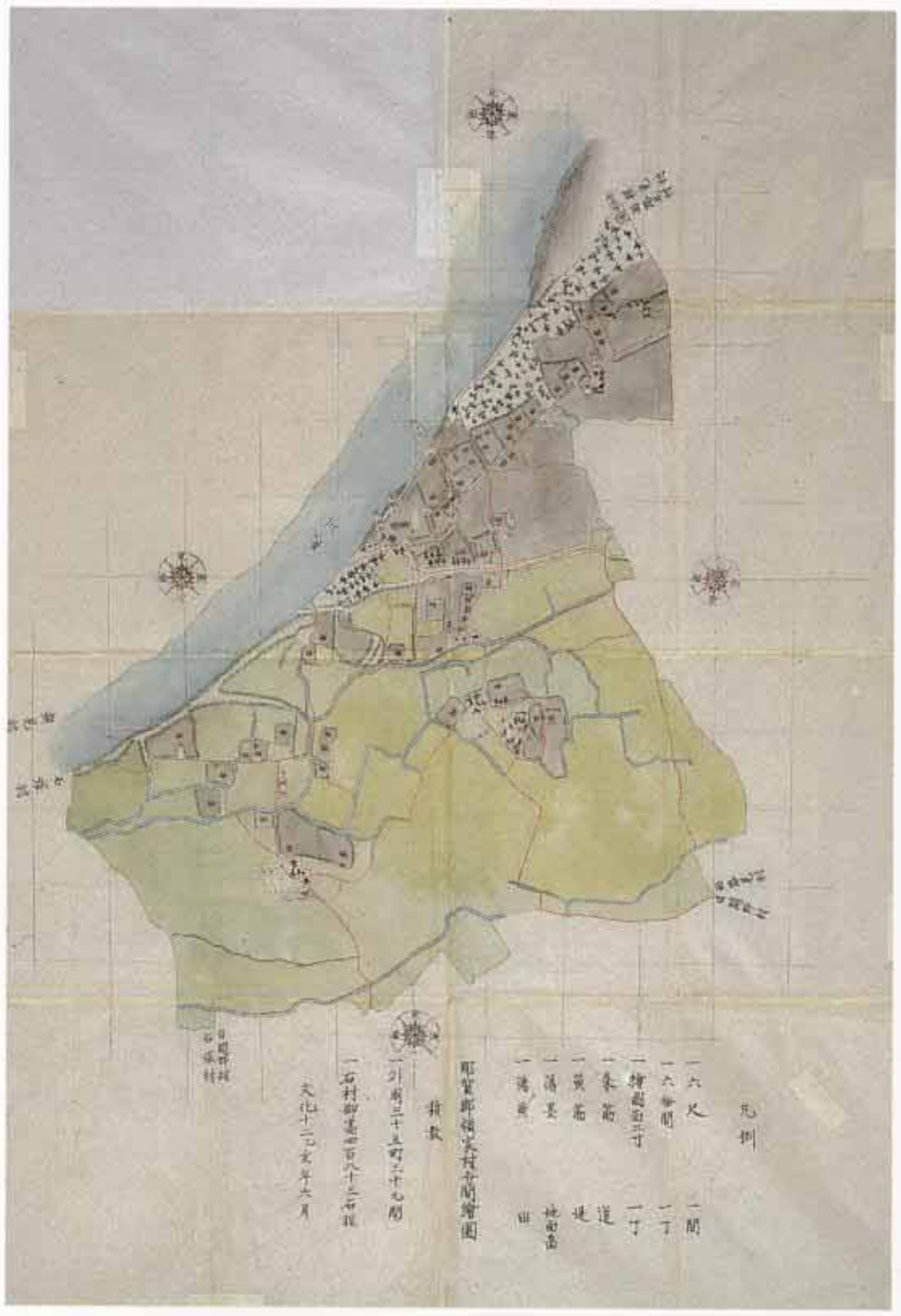
徳島城下絵図　天保３年
（徳島県立博物館蔵）187×131cm

美馬郡脇町絵図　文政元年（脇町蔵）141×125cm

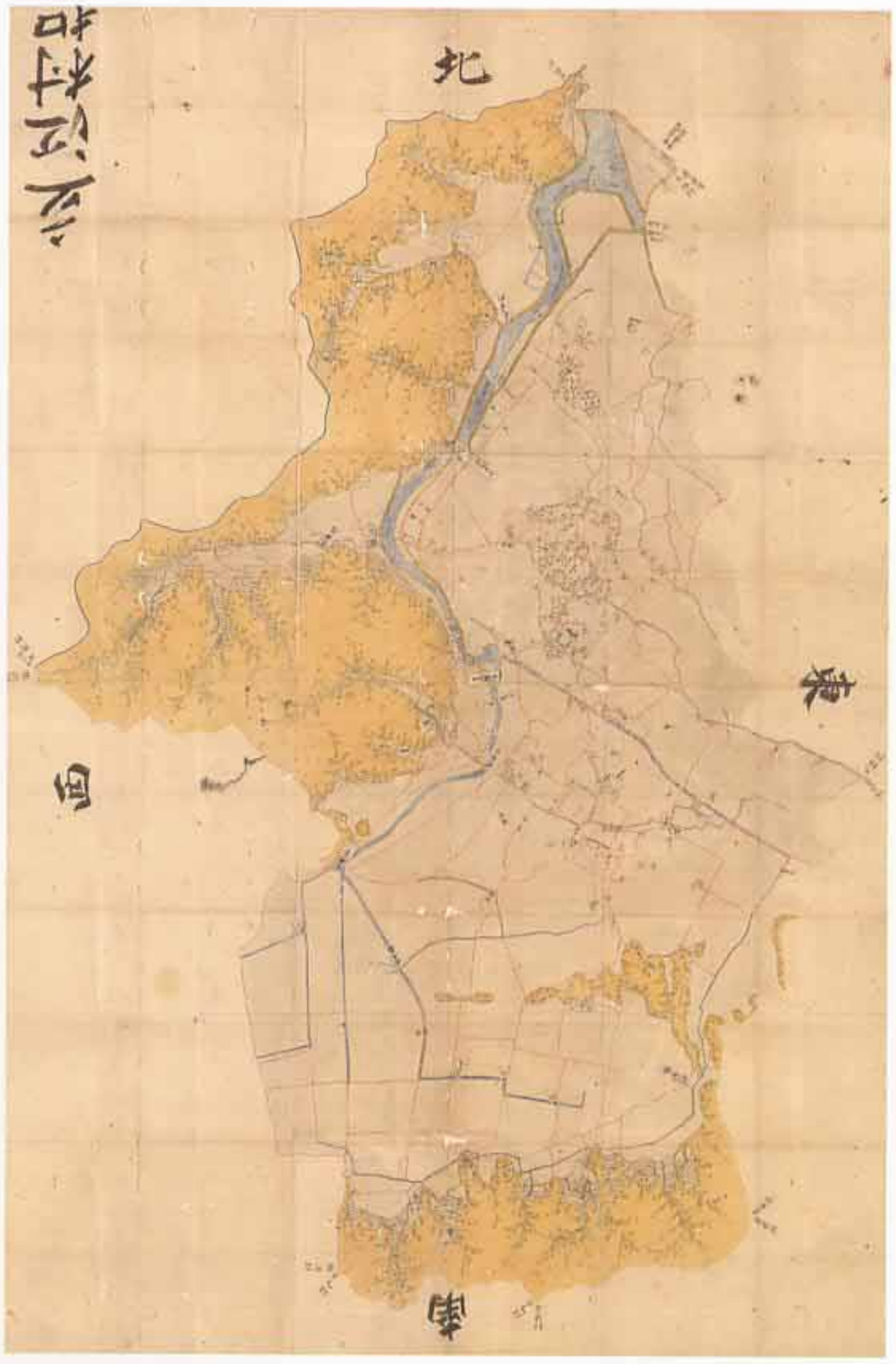


徳島及び周辺図　文久３年（徳島大学蔵）128×246cm（左）125×216cm（右）
※本図は、２枚の図を中央で合成した。

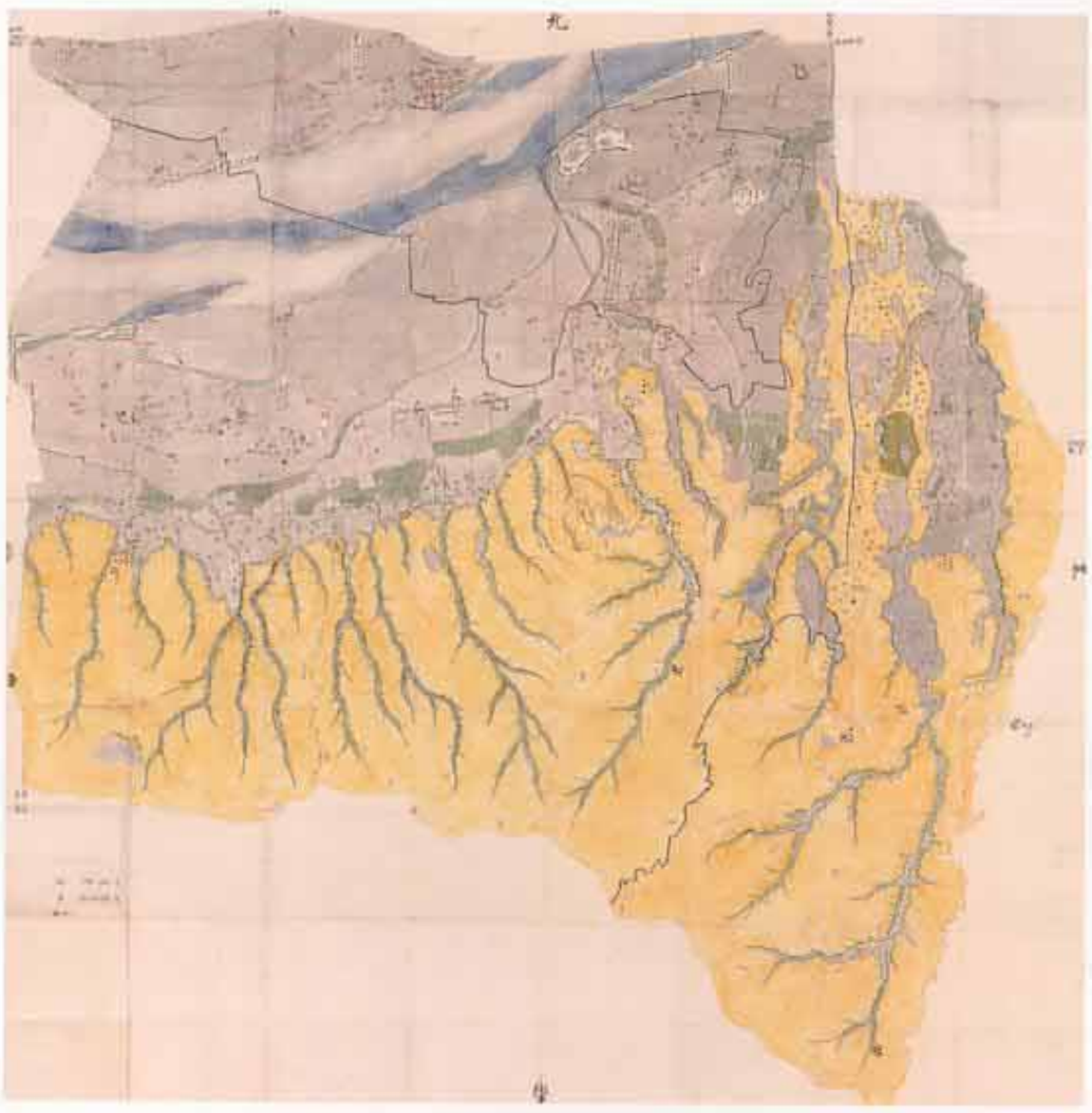
村絵図



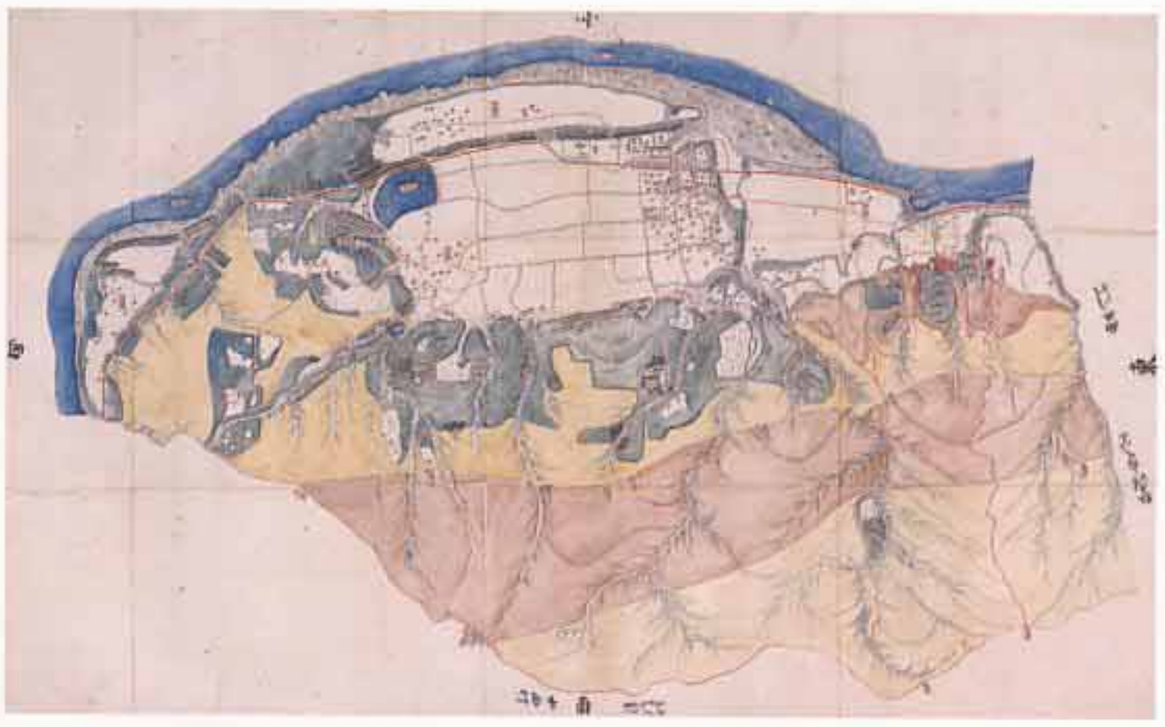
那賀郡領家村絵図　文化12年（阿南市蔵）107×72cm



那賀郡立江村絵図　文化年間（小松島市蔵）149×226cm



麻植郡川島村周辺絵図
作成年不詳（徳島県立図書館蔵）205×210cm



三好郡池田村絵図　作成年不詳（個人蔵）79×130cm

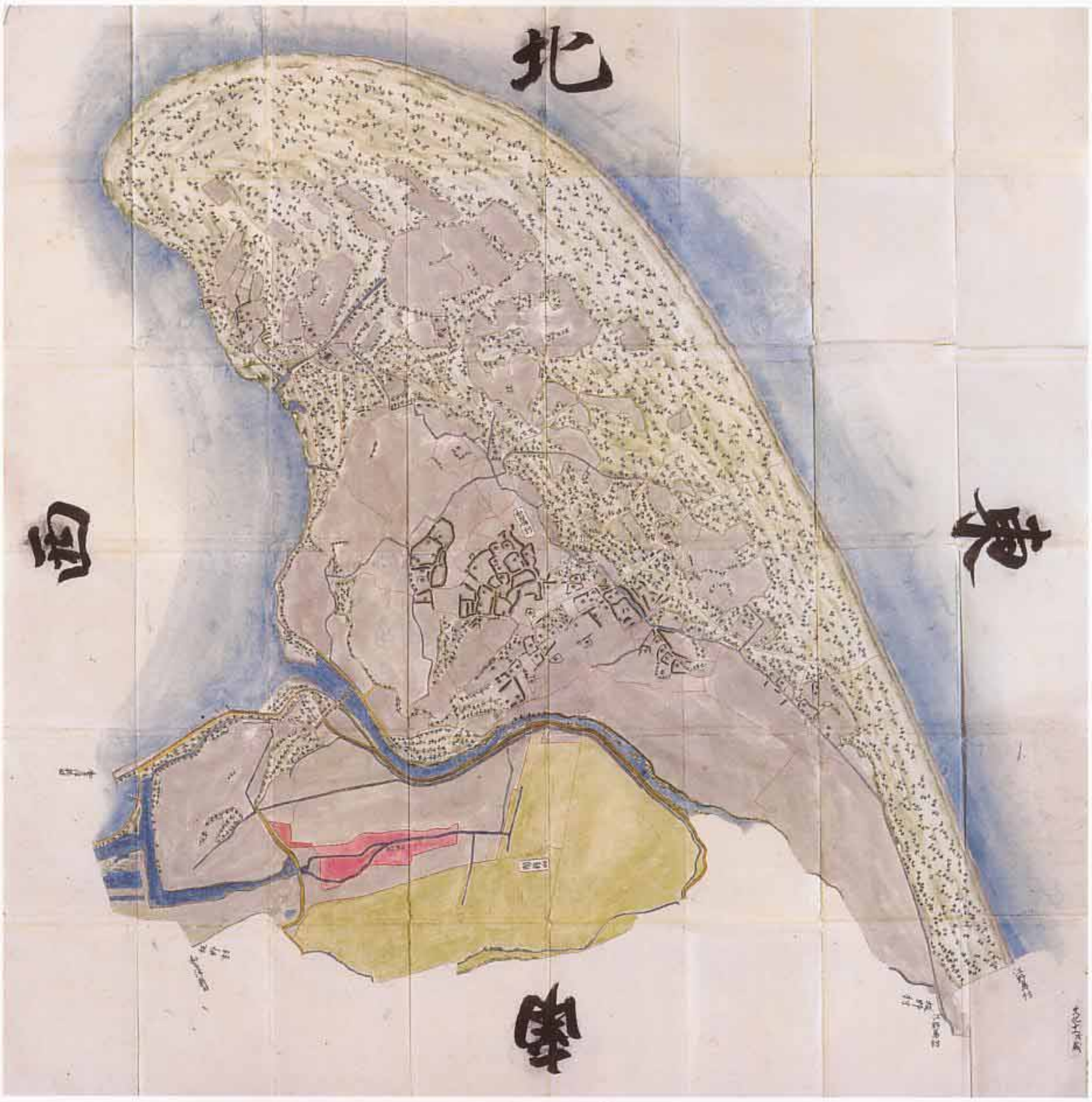
古文書にみる分間（ぶげん）絵図

分間図を作った岡崎三蔵らの足跡は、地域に残る文書の中から少しずつ発見されてきています。

松茂町にある笹木野村の笹木野神社文書（現在松茂町立歴史民俗資料館寄託整理中）の中には、笹木野村の人が村の中を調べて出した「指し出し帳」という文書や、笹木野村と岡崎三蔵のやりとりの文書が残っています。指し出し帳には、村の四方の様子・田畑や林や森の広さや石高・家数・神社・寺・庵などが書かれており、この一冊で、その村の概要がわかるようになっています。村絵図の中には家や神社仏閣が一軒一軒丁寧に書き込まれており、これらの情報は絵図を作るとき大変役立ったと思います。また、村と三蔵のやりとりの文書には三蔵など一行が調査のために飲食をした費用などが書き出され、その費用の一部は庄屋に渡された複製の絵図によって支払われたことがわかるなど、絵図を作成する過程の一こまがわかります。

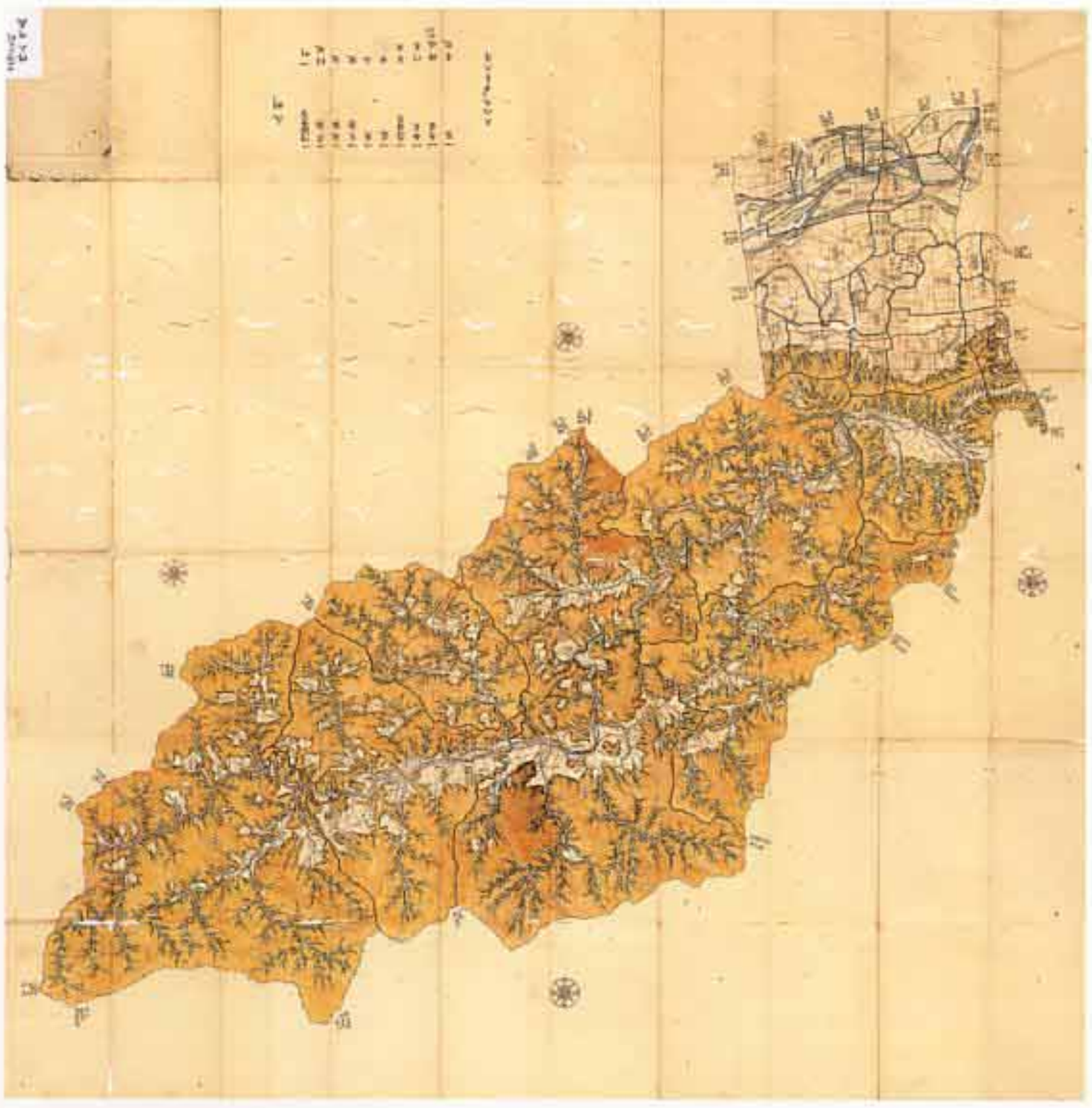
このほか、国絵図御用のための指し出し帳は、工地村（現那賀川町）香東家文書（那賀川町史編さん室寄託）・和田島村（現小松島市）森家文書など村の庄屋であった家にすこしだけ残されていますが、それは全て本物ではなく控えです。本物は岡崎三蔵へ出され、岡崎三蔵側が持っていたはずです。

阿波国には江戸時代村の様子を細かく書き上げた「村明細帳」という帳簿がほとんど無いといわれています。岡崎三蔵に各村が提出したであろうこれらの「指し出し帳」という文書がまとめて残っていれば、分間絵図と共に江戸時代後期の徳島を知る一級の史料となっていたでしょう。しかし残念ながら、現在はそれを提出したと思われる庄屋側に残った控えしか見ることはできません。和田島村や笹木野村のように絵図と帳簿の両方が残っているケースは数少ないと思われます。絵図と古文書の両方の様子を比べることによって、江戸時代後期の村々の姿が本当に身近に見えてくるのです。



那賀郡和田島村絵図　文化11年（個人蔵）154×150cm

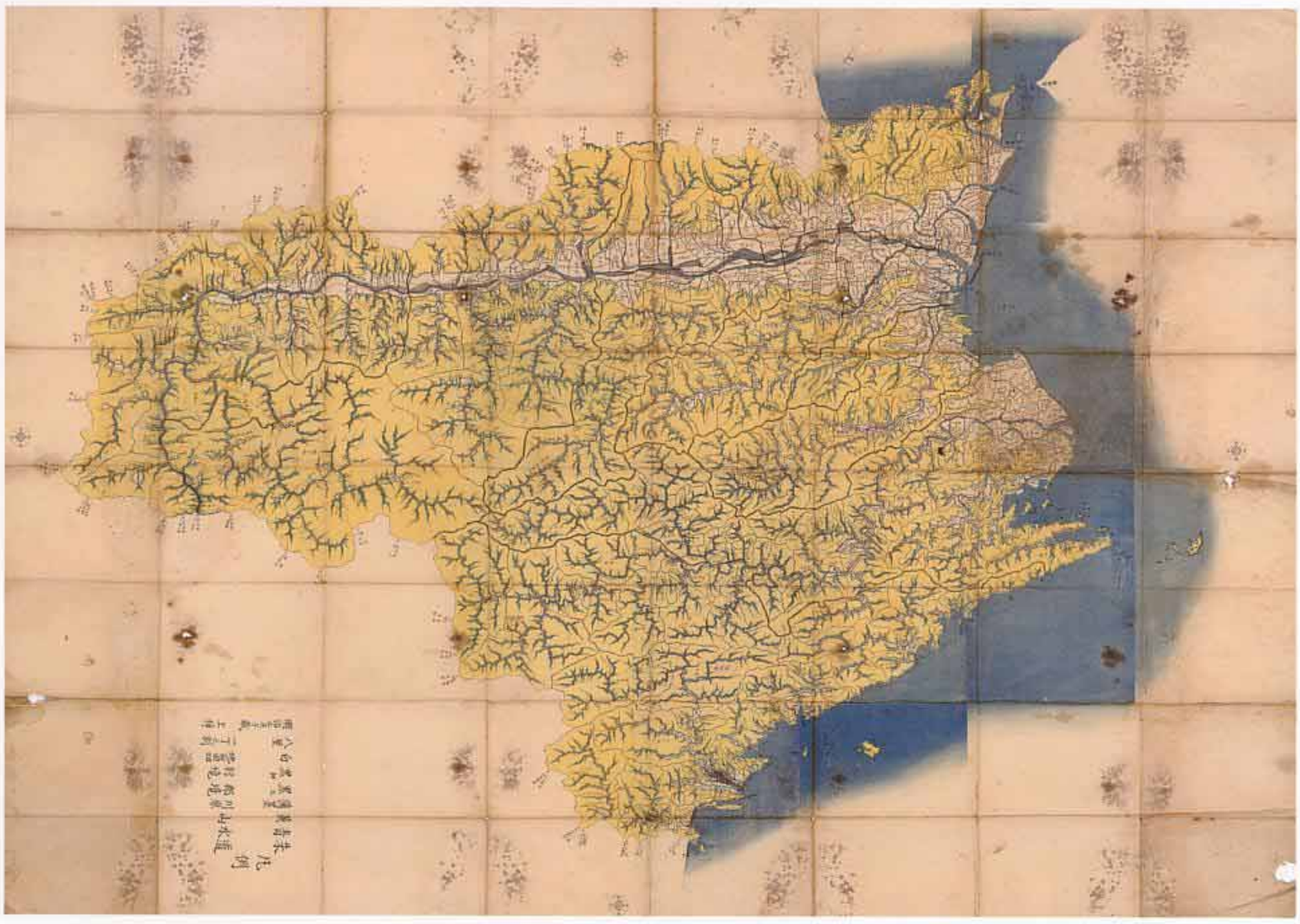
郡絵図



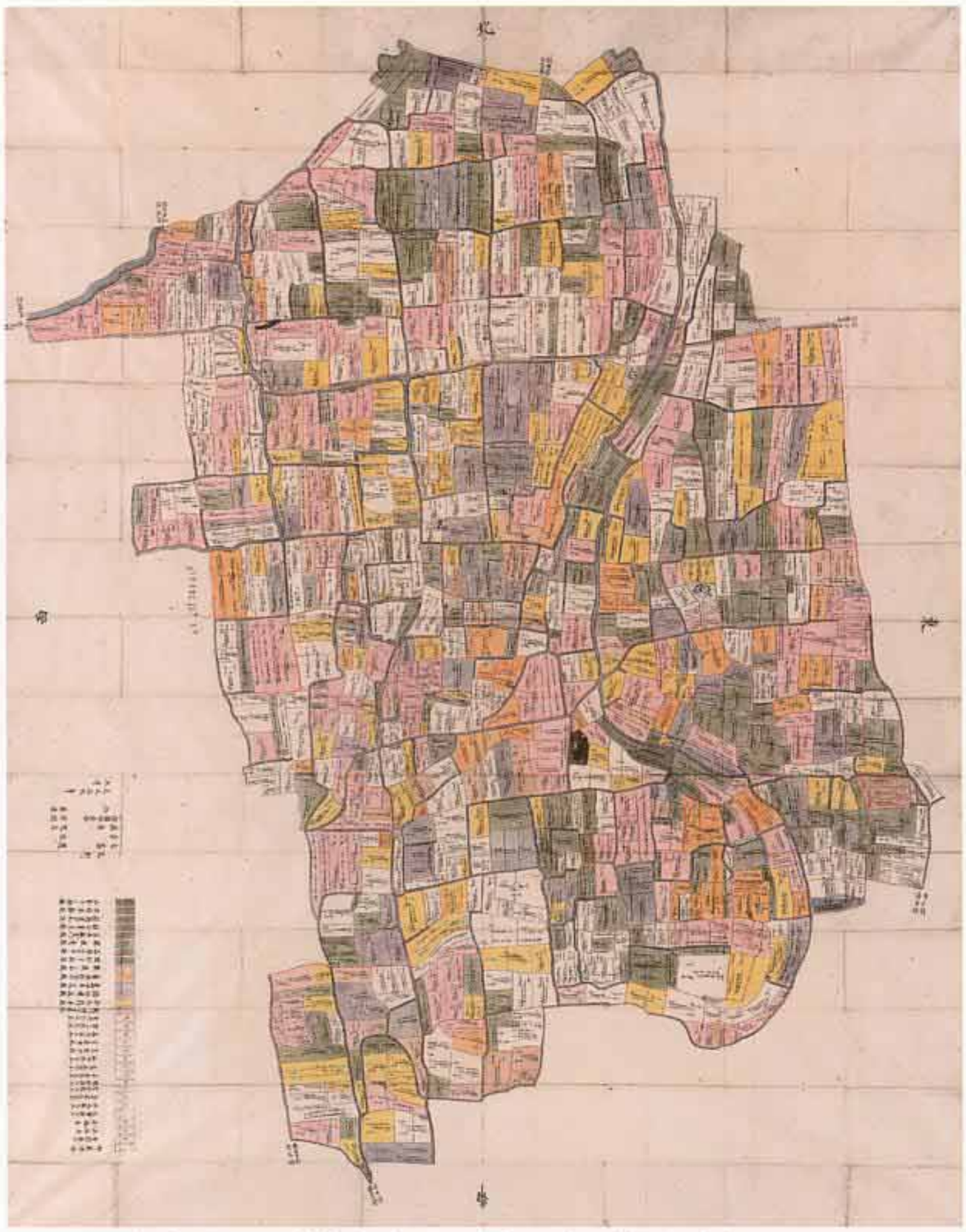
名西郡絵図　文化９年（個人蔵）146×144cm

名東郡絵図　文化年間（四国大学蔵）120×120cm

国絵図



阿波国絵図　明治３年（徳島県立博物館蔵）181×249cm



名東郡日開村給知絵図　文久３年（個人蔵）230×290cm

展示資料目録

標　　題	作成年代	備　　考
【村絵図】		
那賀郡立江村絵図	文　化　期	小松島市蔵（当館寄託）
那賀郡和田島村絵図	文化11年	個人蔵
那賀郡岡村絵図	文化12年	阿南市蔵
那賀郡領家村絵図	文化12年	阿南市蔵
那賀郡南嶋村絵図	文化11年	阿南市蔵
麻植郡川島村周辺絵図（写真）	不　　詳	徳島県立図書館蔵（森文庫）
三好郡池田村絵図（写真）	不　　詳	個人蔵
【町絵図・城下絵図】		
美馬郡脇町絵図（写真）	文政元年	脇町蔵
徳島城下図（写真）	天保３年	徳島県立博物館蔵
【郡絵図】		
名西郡図	文化９年	個人蔵
名東郡図（写真）	文　化　期	四国大学図書館蔵
徳島及び周辺図（写真）	文久３年	徳島大学図書館蔵
【国絵図】		
阿波国絵図	不　　詳	谷家文書（当館寄託）
阿波国絵図（写真）	明治３年	徳島県立博物館蔵
【給知図】		
名東郡日開村給知絵図（写真）	文久３年	個人蔵
【関係文書】		
岡崎三蔵関係文書	文　化　期	笹木野神社文書（松茂町歴史民俗資料館寄託）
工地村国絵図御用ニ付指出帳	文化11年	個人蔵
和田島村　〃	文化11年	個人蔵

※期間中展示資料を一部入れ替えることがあります。

第十九回 企画展
阿波の絵図パート3
―分間絵図の世界―
平成十一年八月三日 発行
編集・発行　徳島県立文書館
〒七七〇―〇七〇　徳島市八万町向寺山
電話　〇八八(六六六八)三七〇〇
印　刷　原田印刷出版株式会社
〒七七〇―〇九〇三　徳島市西大工町四ノ五
電話　〇八八(六二二)二三五六